

新選組と現代企業

大人になってから歴史に興味を持つようになった私ですが、そのきっかけとなったのは江戸時代末期の幕末であり新選組でした。

新選組って、現代のスタートアップ企業にかなり近いと思うのです。

少人数、急成長、現場主義、超ブラック、命懸け。

しかも、メンバーの役割が現代企業に当てはめると妙にハマる。

まず、近藤勇。

この人は、完全にカリスマ創業者。

能力だけならもっと上は存在したのかもしれない。

でも、人がついてくる。

「この人の為なら命を張る。」そんな人を作れる。

これは経営者としてかなり強い。

ただ、問題は組織と自分が一体化しすぎることに。

多分、会社が潰れるまで止まらないタイプ。

次に、土方歳三。

この人は、最強のＣＯＯ（最高執行責任者）。

規律、現場管理、組織維持。

創業者の熱だけでは崩壊する組織を実務で支えている。

ただ、多分この人も会社と一緒に死ぬ。

合理性より「組織の筋」を優先する。

だからこそ強いし、だからこそ怖い。

そして、一番現代経営者っぽいのが斎藤一。

この人は、とにかく生存能力が高すぎる。

時代が変われば立場と変え、名前までも変える。

でも、完全には芯を捨てない。

だから「最後まで理念を叫ぶ人」ではなく、“会社を生き残らせる人”に見える。

正直、現代で一番成功する経営者って、このタイプな気がする。

逆に、沖田総司は天才プレイヤー。

現場では最強だが、経営者というよりトップ営業とかスターエンジニア側。

組織の顔にはなれるけど、会社全体を背負うタイプではない。

こうして見ると新選組って、ただの剣客集団ではなく、かなり完成された“危険なスタートアップ集団”なのだと思う。

でも、その中で最も気になったのは、やはり近藤勇だった。

この人、最初は多分「武士になりたかった」だけなのだと思う。

でも、人が集まり、期待され、命を預けられ、池田屋事件で名を上げ・・・

気付けば近藤勇自身が“新選組局長”という役割から降りられなくなっていく。

現代に置き換えても同じことが言えると思う。

最初は、好きで始めた会社だった。

でも、社員が増え、責任が増え、期待が増え・・・

気付けば「自分が止まったら終わる」となる。

しかも怖いのは、周りが見ているのが、“本人”ではなく“役割”になっていくこと。

社長、局長、リーダー。そして、本人自身もその役割に飲まれていく。

近藤勇って、新選組を作った人間でありながら同時に、新選組によって作られてしまった人にも見える。

しかも、新選組が今でも語られるのって、単純に強かったからではない。

合理的に考えれば、途中で降りた方がいい場面なんて幾らでもあったはずだ。

それでも仲間を背負い、役割を背負い、最後までその立場から降りなかった。

その不器用さにどこか人は惹かれてしまう。

多分、現代の日本人って、どこかでまだ、責任から逃げない人、筋を通す人、組織を背負う人、最後までやりきる人に“美しさ”を感じてしまう。

そんなことを考えながら、やはり自分は斎藤一を見習おうと思う。

斎藤一のようにしれっと生き残り、したたかに働き、時代に合わせて変化していくくらいがちょうどいい。

歴史の偉人たちに学びつつ、無理なく、楽しく、でもしっかり前へ進んでいこう。